ヨハネ3:16「神・罪・救い」

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

救いのお恵み。救いを喜び楽しむということが、わたしたちの信仰生活において一等大切なことであります。救われ、よく救われること。そうであってはじめて「きよめられる」ということがあるわけですし、また、よく救われてこそ、他の人を救いに導くことができるわけですから、今日は救いのお恵みについて、初歩にかえって考えてみたいと思います。

さて、歯医者を考えたら、救いを理解する助けになるかもしれない。わたしたちは自分で自分の歯を抜くわけにいきません。必ず歯医者へ行くのでなければならない。そしてまた、なんでもよいから歯医者へ行けばいいというのではない。歯が痛くて困っているのでない限り、歯を抜いてもらうわけにいきません。ですから歯医者へ行って、虫歯が痛いくてしょうもないことを認めて、はじめて歯を抜いてもらうことができるわけです。歯医者とは、ちょうど神様のようです。虫歯とは、ちょうど罪の問題のようです。歯を抜いてもらうとは、救われるということであります。そういうわけで、歯医者、虫歯、歯を抜くということが、ちょうど神・罪・救いという順番のようであります。この神・罪・救いの順番で考えてみることといたしましょう。

まず第一に、神様であります。

神様とは、わたしたちにとってどれほど大切な存在でありましょうか。

戦争になって戦場で多くの若者たちが死んで行くときに、どの国のどの兵隊であっても、死ぬとき叫ぶ言葉は、正義ではない、勇気ではない、国を愛する言葉ではない、万歳ではない、「おかあさん」という言葉だそうです。それを考えますと、わたしたち人間にとりまして「おかあさん」というのがどれほど大きい存在か、よくわかります。

しかし、その大事な「おかあさん」が病気になって床についたとき、息子娘こう祈るのではありませんか。「神様、どうかおかあさんを救ってください」　おかあさんは偉大な存在だけれども、おかあさんが死ぬか生きるかというときになると、わたしたちは、おかあさんより大きな存在、神様に祈らざるを得なく

なります。

そうしてまた、必死のわたしたちの祈りにもかかわらず、おかあさんが臨終を迎えるというときには、息子娘はこう祈るのではありませんか。「神様、どうかおかあさんを天国へ導いてください。天国で平安を与え、いつかまたそこで会えますように」　おかあさんは偉大な存在であるがゆえに、永遠の命というものがぜひともなければならない。そうわたしたちは真剣に要請するのであります。そうして、われらはかない人間に永遠の命を保証することができるお方があるとするなら、それは、わたしたちではない、おかあさん本人でもない、ただ神様だけが、われらに永遠の命を保証することのできる能力を持ったお方でありたもうのです。これは別段聖書を読まずとも、すべての人の心に、こういう理解、こういう願望が、自然と植えつけられているのでありまして、これが万人共通の宗教的真理というべきものでありましょう。

そういうわけで神様とは、わたしたちから決して遠い存在ではない。むしろ、おかあさんを思う自然な心の動き。おかあさんに天国で幸せでいてほしいと願う素朴な祈り。わたしたちが抱く永遠への願望。そこへもう神様がいましたもう。ローマの信徒への手紙第1章20節で「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」とパウロが述べているのに通じております。

さらに一歩進めば、永遠を思うおもいというのは、身代わりの犠牲ということと、もうすでに密接に結びついております。わたくしの家内の母方のひいおじいさんに、仁平豊治とナカという夫妻がおりまして、これが明治時代に名古屋で弁護士をしていた人でありました。ところが豊治とナカの間に生まれた幼い子が病気で死んでしまいまして、熱心に仏教を信仰していた豊治とナカは、死んだ子どもをどうしてもあきらめることができないゆえに、名古屋じゅうのお寺というお寺を訪ねまして、死んだあの子はどうなってしまったのか、お坊さんというお坊さんに尋ねましたが、だれも要領を得た答えが得られない。答えを得られないものだから、もう気も狂わんばかりになって床にふせってしまった。それというのは、「ああ、あの子の代わりにわたしが身代わりになって死ねばよかったものを、なんでそれができなかったか」という思いが、心を苦しめたからであります。あんまり苦しむもんだから、心配して知り合いのお坊さんがお見舞いに来てくれたんだけれども、そのお坊さんはこう言ったのでした。「仏教では、あの世のことはわからない。わからないから答えようもない。あの世がどうなっているかについてはキリスト教に尋ねたがよろしい。そうすれ

ば答えが得られるでしょう」　そういうわけで、豊治とナカはお坊さんの勧めキリスト教会の門を叩き、そこにてはじめて愛の神様がいましたもうこと、神様のもとへ行くこと、これすなわち天国へ行くことであること、永遠の命が確かにあることを知って、キリストを信じてクリスチャンとなったのでありました。家内はそっから数えて四代目のクリスチャンということになります。

さて、仁平豊治とナカが、自分の大事な子を亡くしたときまず思ったのは、「ああ、わたしが身代わりに死ねばよかったのに」ということでありました。われわれは、自分の大事な人の永遠の幸せを願い、祈るものです。大事な人の幸せのためなら自分が身代わりに死んでもかまわない、それがわれわれ人間の思いであります。そういうところへ、もう神様が半分以上姿をあらわしていたもう。神様というは「身代わりになってまで救おうとする神様」であります。そのお方をわれわれは、われわれ自身の素朴な心の動きを通して、すでに見て、知っているのであります。

さて、第二に、罪ということを考えなければなりません。

すなわち、神様は「身代わりになってまで救おうとする神様」であるんだけれども、では神様はわれわれを何から救おうとなさるのか。神様は、われわれを罪から救おうとなさるのでありまして、罪から救われる、これが救いであります。そこで、救いがわかるためには、われわれは、われわれ自身の罪がわかっていなければなりません。

ある牧師がタクシーに乗りまして、運転手との話題が宗教のことになりました。運転手が申しました。「どうもあたしはキリスト教というのが嫌いで、あれは、弱い人間が信じるもんでしょう」　牧師はすかさず答えました。「どうですかね。おれは強いと思っている人間が、だいぶ刑務所に入っているようだが」

パウロがローマ書 3:10 で言っておりますように、「正しい者はいない。一人もいない」というんであります。そういう聖書の観点から見るなら、刑務所にはいっている人も、刑務所にはいってない人も、みんな同じ罪人ということになる。これに納得しかねる人が大多数おるかもしらんけれども、確かに聖書はそのように、すべての人を罪人と見ているのであります。罪人には二種類あって、刑務所の中にいる罪人と、刑務所の外にいる罪人と、でもどっちもおんなじ罪人だ、ということであります。

これはどう考えたらいいんだろうか。こう考えたらどうでしょうか。傷んだ食べ物を冷凍庫へ入れておきますと、凍ってしまいます。凍っておりますと、傷んでいることが外目にちっともわかりません。ところが冷凍庫の外へ出してしばらくしますと、とけてきて、ああやっぱり傷んでるんだな、ということが見た目にわかってまいります。人間もそれと同じでありまして、わたしたちは生まれながらに家庭環境やしつけや道徳や法律や社会秩序や文化や国家というもので、いわば冷凍にされているのであります。カチカチであります。そういうふうに抑制されておりますから、この抑制の恩恵のおかげで、なかなか罪人だということがあらわれて来ない。これ自体は感謝なことですけども、ひとたびこの抑制の恩恵がとれてしまったら、つまり、家庭環境やしつけや道徳や法律や社会秩序や文化や国家というものが、ちょっとゆるむようこなことがあれば、とたんにわたしたちは罪人の罪人たるゆえんを、あらわにするのであります。

ジョン・ウェスレーは、罪とは二心であると看破いたしました。すなわち、欲深い心というのがあって、その上に、世間に見せる真面目な心がかぶさっております。で、真面目な心というのは、確かに見た目が真面目だけれども、それは、欲深い心のほんとうのありようを覆い隠している仮面なんである。それが証拠に、わたしたちは真面目な心と、その奥にある欲深い心と、適当に使い分けているじゃないか、というのであります。

これは耳の痛い指摘ですけども、二つに分かれた心、二心に対してウェスレーは、きよい心とは単一の心であると申しました。すなわち、心がもう以前のように二つにわかれているのではない。本心と仮面と使いわけるというのでない。単純率直に神様を愛し、単純率直に隣人を愛するという、愛において一つに統合せられた心、単一の心が、きよい心であるという。で、わたしたちが救われ、よく救われ、きよめられ、まったくきよめられるというのは、かつて二心であったもの、分裂した心であったのが、救われて、単一の心、愛において一つとせられた心へと変えられるという、これが救いであり、これが、まったき救いである、ということであります。

第三に、では、わたしたちはどうしたら、この二心から救われることができるんでありましょうか。

非常に逆説的でありますけども、わたしたちは、どうしたって救われることができない、ということを、まず認めなければなりません。G.K.チェスタートンが申しました。「諸君がガレージの中につったってたって、自動車になれるわけ

ではない。諸君が教会の中につったってたって、クリスチャンになれるわけでないのと同じである」

さらにまた C.S.ルイスが申しました。「人間が自分で自分を救おうとするのは、自分で自分の髪の毛を引っ張って空中を飛ぼうとするようなものである」

わたしたちは、表面の真面目な心という仮面でもって、その奥にある欲深い心を覆い隠しておりまして、そうだろうと指摘されたら、もう苦しくって苦しくって仕方がないのですけども、だからといって、じゃあ自分でこの二心の状態が直るかと言ったら、それは絶対不可能であります。

われわれは、救われるというのが自力ではまったく不可能である、ということを知らなければなりません。どんなに虫歯が痛くっても、自分が自分でそれを抜くすべを持っていないのと似ております。歯医者へ行かなければなりません。同じように、罪の問題の解決のために、神様のもとへ行かなければなりません。

その神様というは、先程述べましたとおり、「身代わりになってまで救おうとする神様」であります。どうやって、神様はわたしたちを罪から救いなさるのか。どうやって二心から救いたもうのか。それは「身代わりになって死ぬことによって」であります。

神様は、わたしたちを深く愛するのあまり、ご自分の尊い独り子イエスキリストを十字架につけてるまでしてくださいました。主イエスキリストは、その尊い命でもって、わたしたちの罪を全部償ってくださいました。

神様は、わたしたちが過去に犯した個々の具体的な罪の行為のひとつひとつについて、御子イエスの十字架によってすっかり全部代価を支払ってくださいました。この十字架による代価というのを数式で表すことができるとしたら、それは「$\infty - x = \infty$」という具合になるんじゃないでしょうか。∞（無限）というのは御子イエスキリストの尊い命の値に限りが無いことを示します。x にはわたしたちの個々の具体的な罪の行為を値づもりした価（あたい）が入ります。さて、わたしたちの罪の借金が 1000 万円だといたしましょう。「∞-1000 万円=∞」でありまして、イエス様の無限のお恵みから 1000 万円引いたとしても、あとに残るのはやっぱり無限のイエス様のお恵みであります。わたしたちの罪の借金 1000 億円であっても、「∞-1000 億円=∞」でありまして、やっぱりあとにはただイエス様のお恵みが残るだけです。さらにまた、われらの罪の借金が 1000 兆

円であっても、「∞−1000 兆円=∞」でありまして、どうしてもあとにはただイエス様のお恵みが残るだけであります。

こういうふうになるわけは、イエス様がただの人間であるというのじゃない。イエス様がまことに神様であり、まことに人間であるがゆえに、そうなるのであります。イエス様が神様として無限に尊い命を持っていたもう。そのイエス様が、わたしたちの身代わりに犠牲となりたもう。なんでそんな犠牲を払ってくださったかと言えば、イエス様がわれわれ一人一人をほんとうに大事に、大切に思っていてくださるからであります。「あの子の代わりにわたしが死んでもかまわない」という、おかあさんの祈りを、どこまでもほんとうに実行なすったのがイエス様です。イエス様は、おかあさんより大きな神様であります。

わたしたちはいま、自分の虫歯が痛んでいることを認めなければなりません。自分で自分の歯は抜けないことを認めなければなりません。そうして、イエス様が尊い命の代価を十字架にかかって払ってくだったこと。だれのためでもなくこの自分のために払ってくださったこと、しかもそれはもう支払い済みであることを信じなければなりません。われわれの罪の代価を全部払ってもらった後で、なおそのあと残っているのは、イエス様の限りないお恵みであるということを、われわれは知らなければなりません。

救世軍の創立者ウイリアム・ブースは、この限りないイエス様の救いのお恵みについて、このように歌いました。救世軍歌１００番にこうあります。

主のみ救いかぎりなし
おおうみににたるあいは
世のひとみなをつつめば
われによせよあいのなみ

おおしふかしわがつみは
なみだにもあらいがたし
くれないのなみよよせて
わがこころをきよくせよ

よわしともしわがちから
いざないにやぶれやすし
いのちのながれよきたり

わがこころを強くせよ

身をおどらせてみなぎる
めぐみのなみをくぐれば
つみのけがれはのぞかれ
主の救いを身にえたり

主の救いを身にえたり。どうかこれが今日のわたしたちの経験でありますように。祈りましょう。